

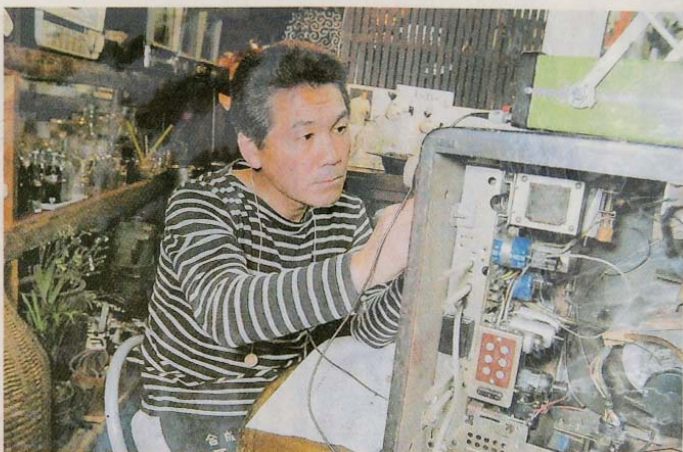
## 昭和の家電よみがえらせるプロ

おおば けいし  
大場 敬志さん (51)

福岡市南区清水

達人列伝

技



昭和のにおいがする。自営の骨とう品・リサイクル店をのぞくと、手動式脱水機付きの洗濯機や白黒テレビ、木箱のうしろシオ。製造期は大場さんが子ども時代を送った一九五五―六四年(昭和三十年代)。どれも立派に作動する。電器店なら「交換部品から、真空管やヒューズなど使用部品を換える。作業中の感電に

## 懐かしい思い出も一緒に

は慣れた。指先がシッとしても、冷静に「来たな」。修理完了まで早くて数日、長くて数カ月かかるが、評判は「口」ミで広まり、開店一年で東京や千葉など遠方からも修理依頼が相次ぐ。客は少々順待ちの状態だ。

岩手県釜石市の農家に生まれ、小学一年のころ、ラジオ番組「まほう探偵」を正座して聞いた。ゲルマニウムラジオを初めて作ったのは小学三年のとき。電源を入れると「ラジオ体挿」が流れた。夢中になった。近所の店でラジオの部品をもらい、組み立てては壊して、の日々が始まった。

地元工業高校を卒業後、電子機器メーカーのエンジニアになった。東京勤務を経て三年前、福岡営業所長に。リストラの風が吹いた。「部下には仕事を継げてほしい。ならば自分が」。一年後退職した。第二の人生は、趣味を仕事にした。

客の大半は中高年だ。持ち込まれる品々は「子どものころ買ってた」と「親の形見」が多い。修理しながら、「お客さんがどんな顔して喜んでくれるかなって想像するのが楽しい」。命が吹き込まれた機械を受け取り、顔をほころばせる客に「大事に使ってください」と語りかける。まがえらせるのは物だけではない。思い出も一緒に。